特集

賓日館（ひんじつかん）

神宮を参拝される皇族方の宿・休憩所として明治に建てられ大正・昭和・平成の時代を経てなお優美な和の建築美を今に伝える二見浦の館をご案内します

正面玄関は、かつては皇族など貴賓を迎えるときにのみ使われていた。

技と意匠を凝らした部屋のしつらい。窓を開けば、松林の向こうに光る青い海。二見浦に面した賓日館は、明治二十年（一八八七）に皇族方の宿泊・休憩所として、神苑会により建てられました。

明治天皇の母である英照（えいしょう）皇太后や、大正天皇になられた明宮嘉仁（はるのみやよしひと）親王など数々の皇族を迎え、民間の旅館を経たのち、現在は博物館として公開されています。

当代一流の建築家や職人の技を集めた建物は、このほど国の重要文化財に指定されました。皇族や神宮とゆかりの深い館の歴史を振り返ってみましょう。

皇族をお迎えするために

賓日館建設を推進したのは、当時の神宮崇敬団体である神苑会です。

神苑会は、明治の御改正に沿い、神都伊勢の景観を整えようと、有栖川熾仁（ありすがわたるひと）殿下を初代総裁に仰ぎ、古市の旅館備前屋の太田小三郎氏らが中心となって明治十九年に発足されました。

会が目指したのは、神苑の整備と、国内初の博物館となる農業館、および徴古館の創設、そして皇族をお迎えする宿の建設でした。

賓日館は、翌年に来勢される英照皇太后のご宿泊に間に合うようにと、十九年の十二月から工事に着工。二十年の二月に完成します。現在の建物は、明治末期と昭和初期に大改修を重ね、創建時より大きくなってはいるものの、これだけ格調高い宿が、わずか三カ月ほどで建てられたとは驚くばかりです。建築費は五千円（当時）ほどで、実質的な管理は隣接する二見館の若松徳平氏が当たりました。

農業館が外宮前に開館した明治二十四年の夏には、皇太子明宮嘉仁親王が、避暑と療養のため三週間余り滞在されています。風格ある回遊式の庭園には、その折に親王が腰掛けられた石などが今も残っています。

明治二十七年には、農業館所蔵の古文書や古器物など三千点あまりが賓日館へ移され、同四十二年に倉田山へ徴古館が完成するまで、仮徴古館として一般公開されました。

庭園から見た賓日館。中央部分の二階が御殿の間で、大広間のある左手の棟は、創建時は平屋建てだった。

皇族を迎えるにふさわしく、菊の紋様をあしらった飾り金具や、二重格天井、寄せ木天井など、格調高い意匠がほどこされた御殿の間。建具の手掛けにきざまれた「神苑」の文字が、神苑会により創建されたことを伝えている。窓辺に置かれた椅子で、何人の皇族方がくつろがれたことだろう。

3

2

1

庭園や館内をめぐれば皇族の記憶がそこかしこに

4

1. 二階廊下には、訪れた歴代皇族の名札が掲げられている。
2. 御殿の間入口の鴨居には、小松宮彰仁親王の揮毫「壽脩」が。
3. 資料室には、くつろがれる皇族方の写真が展示されている。
4. 明宮嘉仁親王が腰かけられたことから「大正天皇の腰かけ石」と呼ばれる庭園の石。

「翁の間」からの眺め。松林越しに青く光る二見浦の海が望める。

明治四十四年（一九一一）、当初の目的と事業を達成した神苑会は解散することになり、徴古館・農業館は神宮へ献納され、賓日館は若松徳平氏に払い下げられて二見館の別館となりました。

和風建築の技と意匠を凝縮

旅館となった直後の明治末、賓日館は大規模な増改築を行います。さらに、昭和四年の第五十七回式年遷宮の翌年から、二度目の増改築に着手します。

この時、玄関の車寄せが入母屋から唐破風に改められ、十二室の客室、百二十畳の大広間が完成し、ほぼ現在の姿となりました。設計管理を担ったのは、遷宮の主任技師を務めた建築家・大江新太郎氏と、造神宮技師・塩野庄四郎氏です。

庭園を含め、いずれの時代の建築にも共通するのは、選び抜かれた材による風雅なたたずまい。欄間や照明、手摺り、引き戸の手掛けにいたるまで、ほとんどが特注品で、現在ではとても造れないような精緻さです。

中でも、皇族専用の「御殿の間」（表紙写真）は創建当時のまま残されており、二重格天井や、輪島塗の床框に施された螺鈿（真珠光を放つ貝を用いた細工）などは目を瞠るばかり。鴨居に掛かる「壽脩」の扁額は、明治三十年にご宿泊された小松宮彰仁親王の揮毫によるもので、親王の号「晩翠」と記されています。

大広間は、桃山式の見事な折上格天井で、桧の格縁はアーチを描き、天井紙は

優れた建築意匠は今夏国の重要文化財に

正面よりの外観。唐破風の車寄せは、創建時は入母屋屋根だった。

窓、欄間、手摺り…いたるところに職人技がほどこされている。階段の親柱には、彫刻家・板倉白龍による「二見かえる」が。

昭和5年からの大改修で、東棟の2階に増設された120畳の大広間。

NPO法人　二見浦・賓日館の会副理事長の高橋徹さん。伝統建築やまちなみ保存に熱心な建築家で、神宮や伊勢の歴史にも詳しい。

型押しをしてから彩色し、金箔をほどこしたもの。舞台下には、能舞台のように音響効果を狙って六つの瓶が据えられており、背景の老松は、郷土の日本画家・中村左洲が描いています。床框は御殿の間と同じく螺鈿の輪島塗で、天井には屋久杉の一枚板が用いられています。

明治・大正・昭和・平成と、世紀を越えて皇族方や一般客を迎えてきた賓日館は、平成九年、国の登録有形文化財となりましたが、その二年後、二見館の休業にともない、閉館されました。

その後、歴史ある館の閉館を惜しむ市民らの保存活動により、平成十五年に二見町（現伊勢市）へ寄贈され、現在はNPO法人「二見浦・賓日館の会」により、博物館として一般公開されています。

そして今夏、優れた建築意匠が評価され、国の重要文化財に指定されます。

皇族の思い出を伝えつづけて

御殿の間へ向かう廊下には、ご宿泊・休憩された歴代皇族の札がずらりと掲げられており、一階の資料室には、くつろがれる秋篠宮殿下や高松宮殿下らの写真が多数展示されています。御殿の間の広縁に置かれた円卓と椅子を見ていると、二見浦を眺めて過ごされた皇族方のご様子が目に浮かぶようです。

まだ賓日館を訪れたことがない方は、神宮参拝前の浜参宮を兼ねて、ぜひ一度お出かけください。

海水浴発祥の地　二見浦

かねてより神宮参拝の禊場であった二見浦は、明治十五年（一八八二）、内務省衛生局長の長与専斎により、日本初の海水浴場に指定されました。

当時の海水浴は、医療目的の浴治といい、海に入る冷浴と、浜辺の浴槽で温めた海水に浸かる温浴とがあり、賓日館に隣接する二見館が、海水温浴場を持つ最初の旅館となりました。

明治二十四年の明宮嘉仁親王の賓日館ご滞在によって、二見の地名と海水浴は全国に知られることとなります。

やがて、神都線や参宮線など鉄道の開通を受けて、日清・日露戦争の傷病兵らが多数療養に訪れるようになり、「潮湯治」を謳う旅館街が形成されていきました。賓日館の資料室には、当時の様子をうかがわせる版画などが展示されています。

明治28年の絵図。仮徴古館として開館していることを案内するポスターのような内容。

明治25年の「二見浦真景之図」。浜辺に温浴槽のある二見浦海水浴場が描かれている。

明治期の看板。

案内してくださったNPO法人　二見浦・賓日館の会の大倉美希さんは、学芸員的存在。明るくて、皇族の知識がとっても豊富。

賓日館
入館料　大人300円、小・中・高生150円
9:00～16:30　火曜定休（祝日の場合は翌日）
（問）NPO法人　二見浦・賓日館の会
伊勢市二見町茶屋566-2　TEL0596-43-2003　http://hinjitsukan.com

神宮会館の特別展ご案内

第62回神宮式年遷宮風日祈宮橋修造
風日祈宮と神宮正宮別宮

昨年の宇治橋に引き続き、本年は風日祈宮橋の修造工事が始まっています。9月17日に予定されている渡り始めを奉祝するとともに、稲作の順調を祈る風日祈宮祭を写真パネルで紹介する企画展を、神宮会館西館ロビーで開催しています。

また風日祈宮以外の別宮でも、御正宮と同様に御鎮座以来、連綿と祭祀が行われていることを知っていただくため、同じく写真パネルを展示しています。神宮会館へお越しの際はぜひご覧ください。

神宮会館西館ロビーの展示と、修造工事の進む風日祈宮橋。